

アーネスト・フェノロサ（米国1853~1908）は日本の美術を救ってくれた恩人として、私達が忘れてはいけない明治初期に来日したお雇い外国人です。

当時の日本は、急激な西洋化のなかで西洋文明が全て最上のものと錯覚し、日本の文化財、美術品はとるにたらないものとして評価が下がり、また、大名・家老が没落したり、お寺が江戸幕府による保護・特権が廃止されて困窮した結果、多くの美術品が二束三文で国外に流出していました。

フェノロサは来日後、様々な日本の美術品の魅力に心を奪われ、日本の文化財や美術品を、初めて西洋の鑑定の概念を導入し、調査研究、系統的な分析を行いました。

そこで、特に西洋美術と比較して日本にしかない芸術があると唱え、日本の美術の復興、国宝の概念など保護を訴え美術品の危機を救ってくれました。

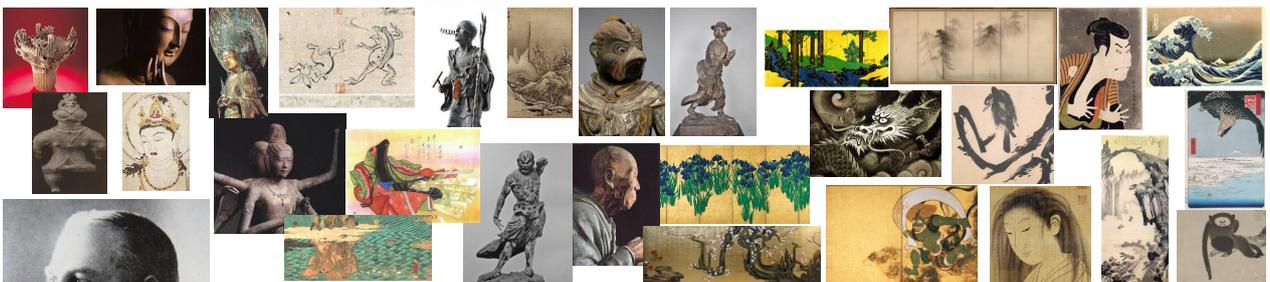
また油絵中心の西洋画に対して日本画という概念を作り、明治以降の新しい日本画の指標を唱えました。

※日本画という言葉、概念は明治15年のフェノロサ講演「美術真説」が初出です。

当時の西洋絵画の主流は、宗教的逸話や歴史的事件や理想化された自然、人物を技巧を凝らして写実的に描かれたものが高く評価されていましたが、フェノロサは、美術は写実の技巧の驚きに称賛が与えられるべきではないと主張し、以下のような西洋に無い日本画の特徴を高く評価しました。

- 余白をあえて書き込まないことや、左右非対称、主題を正面に配置しないなどの構図で、簡素でありながら空間のひろがりを感じさせる手法。
- 草木鳥類、四季の移ろいなどの魂の無いものに精神性をあたえている作品群。
- 当時、他の国にはない、庶民が美術を廉価で楽しむことができる高度な技術に裏付けられた浮世絵文化。 など

美術品を保護、研究、収蔵、人材を育成する施設として美術館（東京国立博物館の前身）美術学校（東京芸術大学の前身）の設立に尽力し、その努力は明治30年、古社寺保存法が成立し、国宝指定が始まることで結実します。



フェノロサは以下の言葉を残しています。
 「日本では全国民が美的感覚を持ち、庭や置物・日常用品、枝に止まる小鳥にも美を見だし、最下層の労働者さえ山水を愛(め)で花を摘む」
 現代の日本人はどうでしょうか？



フェノロサ